

戦 略

戦略とは、『孫子』で云うところの「算（＝見積り）を精しくして、その上にて謀慮をめぐらし、戦に勝つべき手だて（＝作戦）を創出して軍をする（＝軍を動かす）」ことを云うのである。この戦略に疎ければ、拙い軍ていへをすることがある。将たる者は、十分に思慮して創意工夫しなければならない。

○戦略は又、軍略とも云うものである。しかしながら、世の中には軍法と戦略とを取り違えている人が多い。軍法というのは、軍中の諸法度であり、事前に定めておく旋のことである。戦略とは今述べたように、戦に勝つための手だてを工夫して軍を動かすことである。俗人のいわゆる軍法は、戦略であると理解せよ。

○戦略に精通したいと思うならば、和漢の軍記を多く読んで自然と会得すべきである。いずれにせよ多くの先例を知り、その上に寂然不動じやくねんの勇氣と機略を修得できた人でなければ、急速臨時の場において、胸中から湧き出ずるものにはならないが、初学者のために大略を左に挙げるものである。さらに工夫しなければならない。

○『孫子』に「兵は詭道」というのがあり、接戦の妙境とされている。ところが聖人の兵法を学ぶという人によくあるのだが、この「詭道」という言葉をことの外に忌み嫌うのであるが、そのような先入観は捨てよ。もちろん「詭」は「いつわり」と読む字であって虚言うそを意味するが、これだけで虚言・いつわりと見るのは適切ではない。ただ軽く「そうではない事」と理解すればよい。その趣意は東を討つようにして西を討ち、鷹狩りするようにしてそのまま戦を仕掛ける事などであり、「そうでない事」をして勝ち易い手段や方法を取るための一時の謀を指すのである。

○間（かん＝スパイ）を用いることは、全て一時の権謀であり、定まった方法はない。そうは云えども間を用いることの大略を知らなければ、用いるのが難しいものである。『孫子』に「五間」というのがある。郷間、内間、反間、死間、生間である。郷間とはその郷民を間に用いるのである。内間とは敵の身内の者を用いるのである。反間とは敵方からこちらに來た間を、却って我が間に用いるのである。死間とは漏らしてはならないような事を漏らして、敵方へ風聞させ、味方でこれを漏らした者を尋ね出してこれを殺し、敵に実のように思わせて、別に謀をめぐらすのを云う。生間とは間を遣わして、敵の様子を見聞するのである。生きて帰る間ということである。総じて間には謀計の主となるものであるから、戦略で最も重要なものであると理解せよ。

○「夏、南を征せず、冬、北を伐たず」と云うことも心得ておくこと。新田義貞の北国落ちなども時節が遅くなったがゆえ、寒気のために謀がうまくいかずに敗れてしまった。日本の中であれば、焦がれる程の南国は無いけれども、北国で行動するのであれば時節を考慮すべし。

○性急にして強い敵であれば、味方は懦弱だじゃくなように装って敵を驕らせて、討つこともある。

○終日合戦しても、勝負が決しないので戦を中止し、後日勝負をつけようと約束する時などは、昼の戦いで味方の主だった指揮官たちが多く討たれて、味方は大いに疲れしているなどと流言して敵の気を驕り怠らせて、急に夜討ちすることもある。

○敵が短慮の大将であれば、こちらから無礼の振舞いを仕掛けることで怒りを起させ、無益な戦をさせて疲れさせ、その疲弊したところを討つことがある。

○優柔不断にして懦弱な敵将であれば、短兵急に挫け。

○怨み事があって軍を起こした敵であれば、ねんごろに言い訳などして、和睦を取りつくり、油断しているところを討つことがある。

○残虐・暴虐にして村里を犯し、掠める者があれば、威勢を強大に張って挫き、武威を示して一挙に討ち取れ。

○全員がしっかりと鎧冑で身を固めている敵であれば、軽々しく軍を仕掛けてはならない。よく工夫して行動せよ。

○大敵を見てこれを侮るといふのは、古の勇将にあることで、今どきの理解では少々野猪武者いのししのような感じであるが、敵の大勢を見て臆する心気が露ほどに生じても、その気持ちで取り掛かったのでは、負けることは疑いない。その一方で、味方が残らず一致して大敵を侮る心になって突入するときは、小勢を以て大勢を追い崩したという例は多い。いずれにせよ、力戦は生を忘れてただ死あるのみと念じて斬り込むことが最も重要な心がけである。上杉謙信、加藤清正、本田忠勝などがこれである。

○小敵を見て侮らないのは良将の慎みであると知れ。古も侮り軽んじて、小敵のために大軍を破られた例が多い。よく考察せよ。

○敵地に踏み込んで戦うには、肝要の地を見きわめて、早くこれを取れ。肝要の地とは、これを取れば敵方が行動困難になる場所を云うのである。あるいは米倉又は城郭を見下ろす高所、あるいは運送の道筋、又は大社、大寺等である。

○戦に勝つことでその地を攻略し、敵国に踏込むとき、我を拒むか、あるいは従わずに戦おうとする気色があるような地元の村があれば、皆殺しにして猛威を示し、敵国を手に入れることもあるだろう。また、殺伐乱暴を厳しく禁じて寛仁の徳を示し、あるいは年貢を薄くする約束等をして、敵国民を親しませることもあるだろう。この二

つは時勢と敵国の政治風俗を詳らかに理解しておかなければ、論じ難いものである。（しまひ）その概略を云えば、初めの手合いには皆殺しにして軍威を示し、その後は殺伐を禁じて親しませ、又時宜を見合わせて折々猛威を示すことが、敵地を攻略する基本なのである。ただ肝要なのは、寛仁と猛威の徳を相兼ねて、時宜に従って施すことと心得よ。寛が半分、猛が半分では一方だけに偏ることになるので、あつてはならない。

○降伏と称する者には、真の降伏があり、大将を狙うための降伏があり、他の味方と示し合わせて裏切るための降伏があり、この他謀計の降参まで多々あるので、よく察しなければならぬ。真に降伏してきた者を殺してしまえば、これに懲りて以後は降伏する者がいなくなる。そうなれば、その地を攻略するのが難しくなる。又、偽の降伏を助けておけば、害を受けることがあるので、よく確かめねばならない。これを判別するには、降伏する敵將の甲冑等に注意せよ。目印になるような異形の物を着ているのは、必ず意味がある。こうした降人は（敵襲の）先立てなので、斬って害を除かねばならない。又、偽の降参と見ても、速やかに了承して、あるいは城を受取り、あるいは兵隊を奪うなどして、その上に彼の降人あるいは撫育し、あるいは畏服させたならば、真の降人となることもある。いずれも主將の器量によるのである。

○敵国に押入ったならば、その国に豪傑で用いられずに、鬱として時を待つ者もあるだろう。あるいは功德ある者で、推し沈められて上に恨みを抱いている者もあるだろう。又、才智豊であり国中の事を理解している者で、用いられずに引き籠ねんこっている者もあるだろう。この類の者を聞き出したならば、召し出して懇ねんころにもてなし、国土の様子、合戦の手だてや方略等を尋問して、厚く遇するのである。大いに強を得るの道である。さて又、右のように敵国の人を我が手下に用いることは、その国の士民を

安堵させることにもなるのだ。とかく敵国に押入っては、士民が怨みを生じないようにするのが第一である。後ろに氣遣いがあったは、思うままに敵城を攻めることもできない。よく考察せよ。

○総じて戦の妙は、奇正を十分に理解するにある。奇正とは仕手、脇となって行動することである。敵を相手組むのを正兵とし、横槍を入れるのを奇兵とする。しかしながら無形でなければ妙とするには足りないのである。無形とは正が変じて奇となり、奇が変じて正となって、敵をして我が奇正を察知できないようにすることである。もつともそう言ったからとて、妄りに奇兵の働きのみを貴ぶことでもない。元来は正兵にて正々堂々と戦って敵を挫くべきであるが、あるいは人数の多寡、又は敵方の猛将、謀者等により、正々堂々のみではやっていられないこともあるだろう。これが奇正を用いる所以である。すでに奇を用いる上は、自己の奇正を敵に見透かされてはならない。これが無形を重視するところである。神武天皇の軍立てにも、陰軍めいぐん、陽軍おひぐみがあった。つまり、全ての戦で奇正を用いられたのであった。貴ぶべし。思うべし。